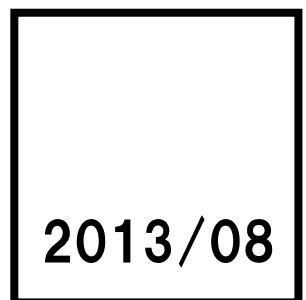




神奈川県立川崎図書館 が所蔵する
全国有数の〈社史コレクション〉を
さらに活用していただくため、
社史の使い方や、社史の楽しさ、
社史情報などをお届けしていきます。



数年前、図書館にかかってきた電話で、「ある社史の厚さを調べてほしい」という質問を受けました。内心、「ページ数ではなくて、厚さとは… なのために必要なのかなあ」と思っていました。該当する社史と定規をもってきて、「だいたい、2センチ何ミリくらいですかね」と回答しました。

電話口で、定規で厚さをはかっている行為が、「自分は何をやっているのだろう」という感じがして面白かった記憶があります。ひよっとしたら、ライバル会社さんより厚い社史を作ろう、なんてことだったのかもしれない。

さて、去年の「社楽」8号では夏休み特集として、長さや重さを調べたので、今年は厚さを調べてみたいと思います。

社史室の書架に並んでいる社史を抜き出しては、普通の定規を使ってほしいの厚さをはかっていくという、あまり正確とはいえない調査です。外函は除き、全何巻の場合は1冊を対象にしました。また、業界団体・商工会議所・県信連・公団といった経済団体等の年史にも厚い本は多かったのですが、今回は調査の対象に含めないことにします。

重さの調査で第1位だった『東京急行電鉄50年史』（1973年）は7.7センチでした。本自体は大きいものの、とり

たてて厚いというわけではない印象です。

8センチを超えると、厚さによる風格？が漂ってきます。明らかに8センチを超える社史には、例えば『兵庫相互銀行五十年史』（1962年）、『住友信託銀行五十年史』（1976年）、『駿河銀行七十年史』（1970年）、『山一證券史』（1958年）がありました。銀行・金融機関等は、メーカー等に比べると厚い社史が多いようです。業種による特徴もあるかもしれません。セメントの『麻生百年史』（1975年）も8センチ超えでした。現在の副総理・麻生太郎さんが社長だったころに刊行され、肖像写真も載っています。

厚い本の代名詞ともいわれていた社史ですが、最近では、紙の品質の向上や、めくりやすさ、分冊化の増加などもあり、見るからに厚い社史は減っているような気がします。

（科学情報課・高田）

社史自由研究・厚い社史は

「風立ちぬ」堀越二郎を社史で調べる

スタジオジブリの新作映画「風立ちぬ」（宮崎駿 監督）のモデルが零戦の設計者・堀越二郎です。

堀越二郎は三菱内燃機（のち、三菱重工）の名古屋航空機製作所に勤めていました。社史にも記載があるのか、念のため確認してみましよう。

おもに戦前の歴史を記録した『三菱重工業株式会社史』（1956年）や『三菱重工業株式会社史写真集』（1954年）には、零戦をはじめ多くの大戦中の戦闘機などが数多く記載されていますが、とくに堀越二郎が関わっていた明確な記述は探せませんでした。

『往事茫茫・三菱重工名古屋五十年の懐古 第1巻』（1970年／菱光会刊行）という当時の関係者の文集には、堀越二郎が「技術一すじ 葎のずいから覗いた名航・名発史の断面」を寄稿しています。他の寄稿者の文章の中にも、堀越二郎はしばしば登場します。

比較的、新しい『三菱重工名古屋航空宇宙システム製作所50年史』（2007年）に収録されている巻末の要職者の在任表では、堀越二郎が初代の技師長（1961.6-1963.3）に就任していたことも確認できました。

戦前の日本の航空産業を母体としている企業は、自動車メーカーをはじめ数多くあります。たとえばオフィスの椅子・机などでおなじみの岡村製作所も、日本飛行機岡村分工場にさかのぼれます。「岡村」という名称は横浜市磯子区の地名です。同社の社史『岡村製作所60年史』（2006年）をご覧ください。

（科学情報課・高田）

※文中の『往事茫茫』は1巻と3巻を所蔵していますが、2巻は未所蔵です。

ご寄贈、大歓迎です。まずは、ご一報ください。

●新着社史から ～ 紙面の関係で2冊だけですが ～

北から南、刊行の新しいものから古いものまで、多くの社史を企業・団体・個人の方々から寄贈していただいています。これからも、ご寄贈をよろしくお願いします。

書名	会社名	資料番号	刊行年月
トヨタ自動車 75 年史	トヨタ自動車株式会社	81567695	2013 年 3 月
日本を代表するトヨタ自動車 が 75 年史 を刊行しました。創業から 2012 年まで、グローバル化していく企業の流れやトヨタ自動車の足跡を辿ることのできる資料です。資料編では車輛系統図などが目をひきます。			
株式会社ユニオンの50年	株式会社ユニオン	81566168	2008 年 3 月
ドアハンドル専門メーカーで、建築金物業界では初めてカラーカタログのダイレクトメールを実施したり、開業当初の東海道新幹線の全駅舎でドアハンドルが使用されたり、独自の道を開いていくエピソードが満載です。分冊では、文化の道を開いた著名人にスポットをあてました。			

●お問い合わせ先 神奈川県立川崎図書館 科学情報課

210-0011 川崎市川崎区富士見2-1-4

電話：044-233-4537 FAX：044-210-1146

<https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html>